

インドネシアにおける日本軍政期の研究

——今日のインドネシア⁽¹⁾にとってのその重要性——

スーシー・オング

はじめに

インドネシアにおける日本軍政期の研究、あるいはこの時期をも取り上げてのインドネシア近現代史の研究は、一九五〇年代初頭から今日まで多くの研究者によって行われてきた(倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』(草思社、一九九二)の「文献目録」を参照)。それぞれの研究者は、特定の時代的社会的背景に制約されてその独自の視点と問題意識を以て研究を進めたのであり、当然ながらこの時期に対する評価も区々であった。軍政期がインドネシア社会に与えたインパクトを重要視しない、いわばオランダ植民地時代末期から軍政期の後の独立国家時代との連続性を主張する者もあれば、軍政期の

インパクトを重要視しその前の時期とその後の時期との断絶性を主張する者もある(Cribb, 一—二二頁)。また、軍政期に政治教育と軍事訓練を受けた青年層が議会制民主主義(政党政治)をはじめ西洋の制度すべてを敵視するのであり、この層が後に共和国の国軍の中心勢力をなし、政党勢力を排除しての軍部主導の権力総結集による国家運営への道を開いたと捉える者もある(Cribb, McVey)。一方、特に日本とインドネシア両国の場合、当事者であるため、学術研究の場合においても軍政期に対する評価は、反日感情や戦争責任をめぐる問題など主観的要素が常に付きまとうことが指摘できる。

本論文では、一九九〇年代にインドネシアとオーストラリアでそれぞれ開催されたシンポジウムで発表された、

インドネシアにおける日本軍政期の歴史的再検討、あるいは軍政期直後の「革命期」⁽²⁾に対する歴史観の修正によって間接的に軍政期への歴史的再検討、の論文を参照しながら、今日のインドネシア社会にとって日本軍政期の研究の意義について考えてみたい。

インドネシア史見直しの一環としての
日本軍政期の再評価

一九九三年四月、インドネシアのジョグジャカルタ市において「日本占領がインドネシアのナショナリズムに与えた影響」をテーマとする歴史学シンポジウムが開催された。シンポジウムの報告（報告者は歴史家と法哲学者）及び質疑応答の内容がまとめられ、翌一九九四年に論文集の形式で出版された（Budi Susanto et al.）。

シンポジウム開催の契機について、論文集の編集者は以下のように述べた。フランスのアナール派歴史家 André Burguière が（ジョグジャカルタの研究所に招かれた際）、歴史学研究の目的は過去の史料から現在に新たな解釈を付与すること、歴史とは心性史（マンタリテの歴史）であり、従って、研究対象となる時期の人間の精

神状態を把握することが重要であること、歴史学研究には史料の具備と比較研究の自由と理性に基づいた分析の作業が必要であること、更に、ある民族のアイデンティティ（内容）—ナショナリズム感情も含めて—、は当の民族が自称するものとは同一なものではなく、好むと好まざるを問わず、しかも当事者に意識されることなくその習性と特質性によって構成されてしまうこと、を指摘した。こうした Burguière の指摘を受けて、独立宣言当時（一九四五年八月一七日前後）において、当時の青年たちの行動を支えたのは如何なるマンタリテであったかという問いかけから、日本軍政期に対する歴史的再検討のためのシンポジウムが開催された。

さて、シンポジウムで提示され議論されたテーマについて見てみよう。論文集には、日本軍政期の心性史的側面を概観する論文が二本あった。

まずは、「日本占領期における『指導者』の概念⁽³⁾」と題する論文である。筆者によると、軍政期の特徴となる大衆動員運動にはスカルノらが動員され、軍事訓練と「政治」及び「精神」教育に青年層が動員された。スカルノらは反オランダ植民地支配の闘士であると同時に、

オランダ植民地時代には既に西洋近代的教育を受け、合理主義と効率性を重んじる実務派としての指導者であった。そして、そうした教育「歴」があったからこそ、後の「独立準備調査会」(注10を参照)で近代民主主義国家の憲法制定の役目を果たしたのである。一方、軍政期までに西洋近代教育を受けていなかった、低学歴で低い社会階層出身の青年集団は、軍政下で日本式とされた「青年道場」や「〇〇塾」で教育を受け、更に防衛義勇軍(後述)や警防団、青年団で軍事訓練を受け、上司に対する絶対的服従を特徴とする軍人型指導者へと育っていた。更に、軍政監部(占領軍司令官の事務管掌機関)の宣伝部主導のプロバガンダが奏功し、彼等は強烈な反西洋主義者で西洋関係のもの全てを敵視するようになり、西洋の合理主義のアンチテーゼとしての東洋的精神主義の信奉者となった(以上、一七―四一頁)⁽⁴⁾。

心史的側面に触れるもう一本の論文は「インドネシア武装青年闘士の闘争精神―占領期から闘争期へ」と題され、軍政期に行われた軍事訓練の具体的内容が述べられている。軍事訓練は「セイシン」面を重視し、大東亜共栄圏の防衛の思想を浸透させることを目標とした。具

体的にいうと、訓練所の講演に「ブシドウ精神」が強調され、必要があれば竹槍で敵の戦車に突撃することも辞さないという教えが叩き込まれた。全般的に言うくと、軍政期を通じて青年たちは闘争精神を高められた。ところが、「革命期」においては、共和国政府は一貫してオランダとの交渉による主権承認獲得の方針を取り、オランダ軍との武力闘争を通じての独立獲得を主張する青年集団は政府にとって最大の反対勢力となった。⁽⁵⁾「革命期」には、こうした軍政期の「遺産」のため、共和国の勢力に二極分化が現出した。それは、両者は相異なった文化的影響の産物であったためである(以上、五二―七二頁)。

以上の引用から見られるように、歴史的再検討の作業においては、日本軍政期に対する主観的価値判断が排除され、軍政期の体験(青年たちに対する軍事訓練)とそれが青年たちに及ぼした影響、更にそうした軍政期の体験が「革命期」に如何なるインパクトを与えたのが検討された。それには、民族のアイデンティティの言及や外来文化に対する反発あるいは讚美が全く見当らない。軍政期の主役たちはそれぞれ如何なる体験を経て自己形

成を成し遂げ、それが同時代更に次の時期（「革命期」）に如何なるインパクト与えたのか（軍政期と「革命期」との連続性を如何に説明すべきか）が問題とされたのである。

日本軍政期神話と一九五〇年代の歴史像の

歪曲：一九九〇年代のインドネシア

一九九二年十二月、オーストラリアの Monash 大学 東南アジア研究センターにおいて、インドネシアの学者・識者と、アメリカとオーストラリアのインドネシア研究者三十二名を集めてのシンポジウムが開催された。

一九五〇年代の議会制民主主義に対する歴史的再検討と、一九五〇年代以降今日までのインドネシアの政治的経済的及び社会的変化を捉える作業を行い、そして、それらを手がかりに、未来のインドネシア社会における民主主義の実現⁽⁶⁾を展望していくことが、シンポジウムの課題であった。

シンポジウムで参加者たちが発表した論文が一九九四年 *Democracy in Indonesia 1950s and 1990s* との題で付され出版された。

テーマから、シンポジウムはインドネシアにおける日本軍政期とは無関係に見える。しかし、発表論文に見られる論点あるいは問題提起から、日本軍政期の体験と、スハルト政権の下で作り上げられたこの時期の歴史像が今日のインドネシア社会に如何なるインパクトを与えているのかが見て取れる。

さて、日本軍政を直接に取り上げたのはインドネシアのマングンウィジャヤ (Y. B. Mangunwijaya、宗教家、歴史小説家、哲学者) の論文「偉大なるインドネシアの夢とそれが民主主義の概念に与えたインパクト」である。マングンウィジャヤはまず、日本軍政期においてインドネシア青年が占領軍から軍事訓練を受けたが、こうした戦闘的な若者はやがて建国する共和国の国軍の中心勢力となっただけでなく、更に、後のスハルト政権において政治・経済・社会・軍事・文化といった分野の全般を支配する勢力となったと指摘し、日本軍政に対する認識と軍政が独立後のインドネシア社会に及ぼした影響について以下のように指摘した。

オランダ植民地末期の民族主義指導者に、失われた王朝時代の「偉大なるインドネシア」の復活を訴えるスカ

ルノと、植民地支配からの解放と、理性と民主主義に基づいての法治国家の運営を主張するハッタとシャフリルがいた。また、植民地支配と資本主義的搾取の一扫という運動目標を共有しながら、スカルノはスローガンとイメージ操作による最大限の大衆動員を主張するのに対し、ハッタとシャフリル⁽⁷⁾は段階的で合理的方法で行うべきだと主張した。そして、軍政期に反西洋的「ブシドウ精神」を叩き込まれた青年たちには、スカルノの「偉大なインドネシア」こそが、ハッタやシャフリルの合理主義よりもはるかに大きな感銘を与えたのである。「革命期」においては、スカルノは共和国支持を取り付けるための大衆動員を、ハッタとシャフリルは外交交渉の場で共和国に対する主権承認の獲得を、といった役割分担がなされた。オランダ軍に対する武力闘争ももちろん不可欠だが、共和国にとって決定的な勝利は外交の分野で獲得されたのである。

そして、「革命期」から一九五〇年代まで続いた議会制民主主義が、一九五九年施行の権威主義的な「指導された民主主義」によって打撃を受け、スハルト政権の誕生によって完全に死滅した。日本軍政期に思想形成を遂

げた世代が国家権力の掌握者となり、軍政期を彷彿させる現象が社会に多く現れた。例えば、軍人による社会秩序維持を正当化する国軍の「二重機能」と軍政、パンチヤシラ精神と大和魂、^{ダマワニヤ} Darna Wanita (国家公務員夫人の団体) と婦人会、^{ケルタバクティ} Kerla bakti (地域社会への無報酬の労働) と勤労奉仕。社会に権威主義的慣行が支配的となり、組織の中では、質問することは好ましくない行為で、批判はタブーであり調和を重んじるインドネシアの伝統に反するものとされる。誰もが身分相応に振舞うべきであり、個人主義的で「西洋」式の自由や獨創性は望ましくないものとなる。在職者が全員、単一の同業組織に加入させられる。インドネシアには、あたかもその国家指導者が若き日に体験した日本軍政の慣行が再現したようである。スハルト政権の国家運営のモデルは、日本軍政そのものであった。

それゆえ、一九九〇年代の時点から未来のインドネシア社会のあり方について考える時、上述のような日本軍政のマイナスの遺産を克服し、インドネシアの社会とインドネシアの個人との相互関係について捉え直し、そこによってはじめて民主主義の実現が可能である、とした

(以下、Bourchier & Legge, 七四—八七頁)。

以上の整理に見られるように、この論文で「革命期」をめぐる歴史像の修正（武力闘争一辺倒説の否定⁸⁾）が行われた。一九五〇年以降スハルト政権誕生までの時期は言及されず、論の飛躍も見られた。しかし、日本軍政とスハルト政権との人的系譜の連続性の指摘と、制度・社会慣行、更に「精神面」の類似点の提示という二点で注目すべきだと考える。もちろん、類似点だけで両者を同一視することはできない。その間（一九四五—一九六六）の社会的経済的政治的变化をまず検討しそうした変化の歴史的位置づけをし、そこから、両時期に見られる類似性は果して偶然的なのかそれとも歴史的連続性を持つのかを検証する作業が不可欠である。⁹⁾

次に、スハルト政権下で如何なる国家イデオロギーが作られ、また、それが今日のインドネシア社会に如何なるインパクトを及ぼしたのかについて、以下、David Bourchier 論文「新秩序（スハルト政権—引用者）の政権とイデオロギーの枠内の一九五〇年代」を見ていく。

一九八五年、当時の文部大臣ヌグロホ・ノトスサント主導の下で、インドネシアでは小学校から高等学校まで

のカリキュラムに「民族闘争史教育」（以下、「闘争史」と略す）と名づけられる科目が導入された。それ以降、歴史科目は二科目、すなわち「歴史」と「闘争史」となった。前者は通常の歴史教育であり、後者はイデオロギー教育となる。一九八三年度の「国家施政方針」によれば、「闘争史」は「若い世代に一九四五年の魂と精神と価値観を育む」ことを目標とする。文部省発行の教科書によれば、一九四五年の価値観とはパンチャシラと一九四五年憲法¹⁰⁾と、インドネシア国軍の二重機能への認識である。また、「闘争史」の目標は歴史の学習ではなく、歴史上のエピソードを通じて学生にパンチャシラの価値観、すなわち協同性と連帯感（仲間意識）と英雄的精神と勇敢な精神と犠牲精神などを植え付けるものであった。「闘争史」のテキストの編集者は軍事史専門家でもあった文部大臣である。「歴史」科目のテキストの場合、日本占領期から現在までの部分は全て文部大臣執筆の『インドネシア国史』第六巻に依拠するのであり、「闘争史」のテキストの場合は、文部大臣編集で国家官房府発行の『独立インドネシアの三十年』が種本となる。

ところで、ヌグロホ文部大臣とは如何なる経歴を持つ

者か。彼はもとイギリスの大学で歴史学を学び、インドネシア大学にジャワ防衛義勇軍研究の論文を提出して博士号を取得し、軍関係の複数の学校で講師を務めた。(ジャワ防衛義勇軍とは、日本軍政期の一九四三年十月、連合国軍との戦闘を予想して、日本占領軍の防衛力を補足するために編成したインドネシア人部隊であり、軍事訓練と「日本精神」の「注入」が行われた。)一九六五年のいわゆる九・三〇事件直後、彼は事件についての報告書を執筆した。同年末に、いわゆる「コーネル報告書」(アメリカのコーネル大学のインドネシア史研究者らが作成)が出され、事件の首謀者は大統領からの権力奪取を狙うインドネシア共産党であり、六名の陸軍将校が共産党関係者によって殺害されたという政府の公式的見解に対し、事件は陸軍の内部抗争に起因するものであり共産党は無関係だと主張した。ヌグロホは命じられてこれに反論するための英文の報告書を執筆した。軍の二重機能の理論家として高い評価を受けて准将まで昇進し、一九八二年に国立インドネシア大学学長に、翌一九八三年に文部大臣に任命され、「闘争史」科目の導入とパンチャシラ教育の普及に努めたが、一九八五年、文相在任

中に死去した。

「闘争史」の最大の特徴は軍部至上主義である。「革命期」は「独立戦争期」と名づけられ、武力闘争が大きくクローズ・アップされ外交交渉について記述する頁数は僅かしかない。更に、スカルノ大統領とハッタ副大統領が拉致された後にスマトラ島で樹立された共和国臨時政府⁽¹⁾についての言及は全くない。これは拉致事件によって文民政府が消滅し、スカルノとハッタの釈放までの期間に共和国の存続は全て軍人にかかっているのだ、という論理を正当化するためである。一九四九年末までの対オランダ側の外交交渉(領土的譲歩を伴う)は全て文民政府による愚行だと規定され、軍人とは正反対に政治家たちの革命に対する貢献は微々たるものであり、場合によっては革命への裏切り者であるとされた⁽²⁾。

一九五〇年代の章では、ほとんどが地方反乱と「騒乱」に関する記述であり、議会政治への言及は僅かである。反乱・「騒乱」とそれらに対する武力鎮圧の重要性を強調するため、幾種類かのテキストでは一九五〇年代を自由主義時代ではなく「生き残り(のための)闘争の時代」と名づけるほどであった。そして、それによって、

「独立戦争期」と同様に、一九五〇年代にも軍人が国家統一のために英雄的役割を果たしたことが強調された(一九八四年版『インドネシア国史』では、政治家が国軍を内部対立させ、それによって軍の勢力を殺ぎ、彼等を文民支配下に置くことを画策したとまで非難した)。そして、一九六五年の九・三〇事件の際、軍が再び国家を危機から救ったとされた。

ところが、一九九〇年代に入り、「闘争史」に異議を唱える声が上がった。編集担当委員の中から「政治的干渉」を抗議して辞任する者がでた。教育問題セミナーで、「闘争史」担当の先生が学生たちの物笑いの種になるとの指摘もあった。

一方、教科書から一九九〇年代のインドネシア社会に目を転じると、急速な産業化と経済成長により労働者層と都市中間層が形成されるはじめ、経済的及び政治的権利を要求する勢力が登場した。一九九〇年代に入ってから労働争議の急増と言論と政治結社の自由、司法機関の独立、立法機関の権力強化への要求の動きがその現われである。退役軍人が一九五〇年代の議会制民主主義への見直しを公然と主張し、学者が一九五〇年代の立法機関

の業績について研究を行い、議会制民主主義がインドネシアの政治史の中でしかるべき基盤を持つことがあった証拠を提示した(以上、Bouchier & Legge, 五〇—六〇頁)。

以上のように Bouchier 論文では、スハルト政権は「革命期」と一九五〇年代の歴史像を歪曲することによって、議会制民主主義政治(政党を通じての国民の政治参加)の否定と国軍の「二重機能」の正統性を主張したこと、そのイデオログが日本軍政の研究者であること、彼が文相在任中に近代教育機関であるはずの学校に軍部至上主義と文民政治敵視と「精神」主義を標榜する「闘争史」が導入されたこと、という三点を確認できる。これらはすべて政権の政治的意図に沿ったものであることはいうまでもない。しかし、それらの起源をどこに求めるべきか。国軍の「二重機能」も文民政治敵視も「精神」主義教育も、全て日本軍政期の慣行を彷彿させる。軍政期に結成されたジャワ防衛義勇軍のメンバー⁽¹³⁾は独立宣言後、国軍組織の中核をなしたことは事実である。一方、軍政期以前に、インドネシア人にとってほとんど唯一の軍事訓練(あるいは軍事組織体験)はオランダ植民

地軍隊のそれであり、植民地軍隊の方は合理主義と組織性と職業軍人意識を重んじ、義勇軍の「精神」主義とは対照的であった(Anderson)。従って、義勇軍研究者ヌグロホが主張する、神がかり的ともいえる一九四五年精神とは、軍政期の義勇軍が受けた「精神」教育に由来することが考えられる。

おわりに：歴史学の効用⁽¹⁾

一九九〇年代インドネシア社会(及び外国のインドネシア史専門家)に歴史の再検討の動きが見られた。それは、同時代の政治的社会的行詰りを打開する願望に突き動かされたものだと言える。再検討の対象となるのは、スハルト政権によってその歴史像が歪曲化された「革命期」と議会制民主主義の一九五〇年代である。

「革命期」と一九五〇年代の歴史像の再構築はもちろん必要である。しかし、それと同時に、両時期の歴史像は何をもって歪曲化されたのかという点、日本軍政期神話であると考える。マングンウィジャヤ論文で指摘された軍政期とスハルト政権下のインドネシア社会との類似性、Bourchier論文で指摘された同政権のイデオロギー

とそのイデオロギーと日本軍政期との関連性。これらをもって直ちに両時代を結び付けて捉えることはできないが、上述のような指摘は無視できない。何故に二十年後に(一九四五〜一九六五)、インドネシアの政治文化と社会が軍政期とそれと(マングンウィジャヤが指摘したような)驚く程の類似性を見せたのか、との問題もインドネシア史にとって避けては通れないものであり、「革命期」以降よりもむしろ日本軍政期を起点とするインドネシア近現代史全般への再検討が必要である、と指摘したい。

(1) ここでは今日のインドネシアを一九九〇年代のスハルト政権下のインドネシアという時代の枠組みの中で論を進めていく。周知のように一九九八年五月にスハルトが大統領を辞任し、その直後から政治的改組(政党結成の解禁、出版の自由、翼賛選挙の慣行の廃止など)が実施されてきた。しかし、諸制度の改革を含め社会改革の課題がまだ山積しており、また、これまでの改革も未だ日が浅いため評価しにくい。以上の点から、「今日のインドネシア」を一九九〇年代以降のスハルト政権時代との連続として捉えて妥当であると考えられる。

(2) 日本のポツダム宣言受諾直後と連合国軍上陸前に一九

四五年八月十七日、スカルノとハッタがインドネシア共和国の独立を宣言した。その直後にオランダ軍が植民地支配の復活を目指して共和国潰しに軍事行動を起した。一九四五年十月以降一九四九年末のハーグ協定締結まで、インドネシアはオランダ軍に対する武力抵抗と、主権承認獲得のための外交努力を併行して進めていた。スハルト政権時代、軍人による民事干渉を正統化するため、この時期の外交努力を歴史教科書の記述から抹消し武力闘争のみを強調し、これを独立戦争期と名づけた(Bourchier)。ここで括弧を付けたのは、この時期の命名で主観的価値判断に陥ることを避けるためである。

(3) 原文では「占領期」との用語が使われているが、占領の特徴(＝軍事的)を明確にするために、「軍政期」に統一した。

(4) この報告に対し、会場から以下のようなコメントが寄せられた。現在のインドネシアの教科書のように、心性史的側面が無視され、歴史叙述が史実の羅列のみとなったため、「闘争史」科目(本論文の本文を参照)のような「記憶のファッショ化」が起きた(同書、四九頁)。

(5) 軍政期に軍事訓練を受けた青年たちの一部は共和国の正規軍に吸収されたが、それ以外の者も相当に多い。しかも、独立宣言前後に日本軍から奪った(あるいは与えられた)武器はこうした正規軍以外の武装青年闘士にも流れた。武装青年闘士たちは政府とオランダ軍との協定を無視して協定上のオランダ軍支配の地域に侵入し、オランダ軍側面に、

共和国政府潰しの口実(協定違反、統治能力なし)を与えてしまった。

(6) ここで民主主義の主張とは、スハルト政権による議会制民主主義否定と文民政府否定(国政に対する国軍の関与)に対する批判から出発したものである。

(7) 一九四五年十一月～一九四七年七月の共和国首相。日本軍政期には地下組織活動に専念し軍政との関わり(従って、日本軍仕込みの青年集団との関わり)を一切持たなかった。首相在任中、共和国に対する主権承認獲得のためオランダ外交交渉を担当した。最も典型的な文民政治家であり、後述のようにスハルト政権下ではその役割が公式な国家歴史の記述から完全に抹殺された。

(8) これはマンガンウイジャヤ氏独自の見解ではなく、インドネシアの歴史家たちもこうした修正史観の必要性を主張した。

(9) ジャカルタ発行の社会科学関係の学術誌 *Prisma* 掲載の書評論文「民主化と新体制(スハルト政権—引用者) 国家」(Aminudin: Demokratisasi dan Negara Orde Baru' 一九九四年十一月号、九二頁)の中で、筆者はスハルト政権下のインドネシア国家を統合国家 (Staatsidee integralistik) と位置づけ、統合国家の権力者は国民にとって父権的存在であり、政治的・経済的・社会的更には国民の道徳や文化などあらゆる分野に指導的役割を果すのであり、国家権力に服従しない国民は国家叛逆者・秩序紊乱者との烙印を押されると主張し、更に、歴史を振り返ると、過去

においてインドネシアは日本軍政期にこうした統合国家の論理が適用された、と指摘した。

(10) 両者とも日本占領軍が敗戦を見越して、インドネシアへの独立の約束を具体化するために作られた「独立準備調査会」で審議され、独立宣言の翌日に発布されたものである。パンチャシラとは建国五原則、すなわち神への信仰、人道主義、民族の統一、民主主義(この項目については様々な相異なる解釈の余地を残した)と社会正義のことであり、その全文が一九四五年憲法の序文に挿入されている。なお、パンチャシラの解釈をめぐる政治性について、同シンポジウムの参加者(論文集の寄稿者)の一人でイスラム団体ナフダトゥル・ウラマの会長アブドゥラフマン・ワヒド(現在、インドネシア大統領)は「一九五〇年代と一九九〇年代のイスラムと政治と民主主義」と題する論文で、パンチャシラは一九五〇年代においては自由主義や社会主義、共産主義、イスラム勢力といった複数の政治勢力の共存を容認するイデオロギーであったが、スハルト政権の下では与党以外の政治或は社会勢力を全て否定する、いわば国家権力至上主義を支えるイデオロギーへと「変身」させられた、と指摘した(Bouchier & Legge, 151—155頁)。

一方、一九四五年憲法は大統領に絶大な権力の掌握を認めるものである。スカルノ内閣の解散によって事実上は施行されず、一九五〇年代の議会制民主主義時代には一九五〇年暫定憲法が適用された。一九五九年の大統領令で一九

四五年憲法が復活した。上記のスカルノ内閣とは、一九四五年九月四日、スカルノ大統領を首班とする共和国初の内閣であり、閣僚に軍政監部の役人を兼任する者(プチヨウさん)が相当にいたため「プチヨウ内閣」と揶揄された。地方都市におけるインドネシア青年集団と日本占領軍との武力衝突への対応の不手際と九月末に上陸した連合国軍に「対日協力者」と非難され外交交渉の相手にされなかったため、十一月に解散した。

(11) 一九四八年十二月にオランダ軍が当時の共和国首都ジャバカルタを軍事占拠しスカルノとハッタを拉致したが、その直後にスマトラ島でシャフルディン・プラウイラヌガラを首班とする共和国臨時政府が樹立され、スカルノとハッタが翌一九四九年七月に釈放されるまで共和国政府を代表しオランダ政府との交渉を担当した。これはハッタがオランダ軍の襲撃を予想して、先手を打ったためであった。

(12) その典型的な例はシャフリルだと言える。なお、一九九一年、インドネシア科学研究所(Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia)とオランダ歴史研究所(Instituut voor Nederlandse Geschiedenis)による共同主催のセミナーで、シャフリルの功績に対する歴史的再評価がなされた。セミナーでの報告が後にまとめられて『リンガルジャティ協定の締結をめぐって』との題を付され出版された。その中に、インドネシア科学研究所の主任研究員タウフィック・アブドゥラの論文「武力闘争の最中における交渉の

意味」があった。アブドゥラは「闘争史」で広められた国家史観に対し、「権力の声が歴史への理解に役立つことはない。権力にはそれ自身の声しか聞こえない。我々は、権力の声に押し付けられただけでなく、歴史との和解をも許されなかった。歴史認識において権力に束縛されているため、我々は神話の世界へと導かれた。安らかだが、自己欺瞞でもあった。歴史を学ぶ過程とはすなわち自己解放の過程であり、神話の世界に浸ることは自己をますます縛り付ける過程である。権力によって構築された神話はあつとらう間に具象化し、その結果、人間の頭の中になか存在しない概念が現実と同一視されてしまう。神話は歴史のダイナミズムを支えることが不可能である。神話と具象化は、現在の問題を解決し未来を展望していく民族には、とてつもなく高い代償を要求しているのである。」と述べた。

尚、リングガルジャティ協定とは、オランダとインドネシア両政府との間に締結された最初の二国間協定である（一九四七年三月二十五日調印）。インドネシア政府側からは当時の首相シャフリルが調印及びそれに至るまでの交渉を担当した。協定でオランダ政府は、ジャワ島、マドゥラ島及びスマトラ島に対するインドネシア共和国の事実上の権力行使を承認するとなつた。協定によって共和国はオランダ政府によって初めてその存在を認められた。その時までオランダ政府側は共和国を日本占領軍が作った傀儡政権であると主張し、これとの交渉を拒んだ。一方、領土に関する協定の項目に対し、百パーセント独立、すなわち旧オラ

ンダ領東インド全土に対する承認が実現しなかった（領土的譲歩をした）ため、シャフリルは当時の戦闘的青年たちから非難を浴びせられた。なお、スカルノとハッタは一貫してシャフリルを支持していた。

(13) 独立宣言直後、日本占領軍は義勇軍組織を解散した。「革命期」に入り、共和国軍隊を組織するため、義勇軍の元メンバーが新たに集められたのである。

(14) この表現はジョン・ダウの the uses of history である。John W. Dower, *Japan and the Uses of History*. In: John W. Dower (ed.) *Origins of the Modern Japanese State Selected Writings of E. H. Norman*. New York: Pantheon Books, 1975

参考文献

- Abdullah, Taufik. *Harga Perundingan dalam Kancan Perjuangan* in: Lapan, A. B. & Drooglever, P. J. (ed.) *Melusiuri Jalur Linggarjati*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti, 1992
- Anderson, Benedict R. O.G. *Revolusi Pemoeda*. Jakarta: Pustaka Sinar Harapan, 1988 (trans. from *Jawa in a Time of Revolution, Occupation and Resistance* Cornell Univ. Press, 1972)
- Anderson, Benedict & Kahin, Audrey (ed.) *Interpreting Indonesian Politics: Thirteen Contributions to the Debate*. Ithaca, New York: Cornell Univ. Cornell Modern

- Indonesia Project Southeast Asia Program, 1982
- Bourchier, David & Legge, John (ed.) *Democracy in Indonesia 1960s and 1990s*. Clayton, Victoria, Australia: Centre of Southeast Asian Studies, 1994
- Budi Susanto et al. (ed.) *Politik Penguasa dan Siasat Pemuda Nasionalisme dan Pendudukan Jepang di Indonesia*. Yogyakarta, Indonesia: Penerbit Kanisius, 1994
- Cribb, Robert Bridson. *Gejolak Revolusi di Jakarta 1945-1949*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti, 1990 (trans. from *Jakarta in the Indonesian Revolution, 1945-1949*. Ph. D. thesis, London School of Oriental and African Studies, 1984)
- Frederick, William H. *Pandangan dan Gejolak*. Jakarta: PT Gramedia, 1989 (trans. from *Vision and Heat: The Making of the Indonesian Revolution*. Ohio Univ. Press, 1988)
- Kahin, George McTurnan. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca, New York: Cornell Univ. Press, 1952
- Kwartanada, Didi. Minoritas Tionghoa dan Faisime Jepang: Jawa, 1942-1945. In: *Pengusaha Ekonomi dan Siasat Penguasaan Tionghoa* Yogyakarta, Indonesia: Penerbit Kanisius, 1996
- Legge, J. D. *Intellectuals and the Nationalism in Indonesia*. Ithaca, N. Y.: Cornell Univ., Cornell Modern Indonesia Project, 1988
- Lucas, Anton E. *Peristiwa Tiga Daerah*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti, 1989 (trans. from *The Bamboo Spear Pierces the Payung: The Revolution against the Bureaucratic Elite in North Central Java in 1945*. Ph. D. thesis, Australian National Univ., 1980)
- McVey, Ruth. The Post-Revolutionary Transformation of the Indonesian Army. In: *Indonesia*. No. 11 (April 1971) & no. 13 (April 1972)
- Onghokham. *Runtuhnya Hindia Belanda*. Jakarta: Gramedia, 1989
- Ricklefs, M. C. *Sejarah Indonesia Modern*. Yogyakarta, Indonesia: Gadjah Mada Univ. Press, 1991 (trans. from *A History of Modern Indonesia*. Macmillan Education Ltd, 1981)
- Sartono Kartodirdjo. *Modern Indonesia Tradition & Transformation* (second edition) Yogyakarta, Indonesia: Gadjah Mada Univ. Press, 1988

(この論文の校閲は、大学院時代の指導教員である田崎直義先生にお願いした。そのことを記す)

(一橋大学助手)